

2019年度 関係者評価委員会のまとめ

2019.10.4

2019年度 学校関係者評価委員会のまとめ 2019年9月26日(木)16:00~17:35

(2018年度学校自己評価の形式・内容について、事前に資料をお渡しし、会議までに目を通して来ていただく。)

項目1. ミッションステートメント、育むべき生徒像については、既に共有している学院全体の理念である。

項目2. 中期計画については、2014~2019の学院のⅠ期及びⅡ期中期計画及び2018年度の事業計画を簡潔にまとめたもの。アンケートは、生徒、保護者対象2018年12月実施、教職員対象2019年2月実施で、それぞれ別の内容で行った。

項目3. 2018年度の取り組み内容および自己評価については、2018年度事業計画の具体的な取り組みについて教職員アンケートの内容を評価指標に定め、アンケート結果を元にして自己評価を行った。

9/26当日、有澤慎一氏を委員長、及び司会者として選出し、アンケート結果について2018年度学校自己評価の内容を吟味しながら、質問、意見交換がなされ、質問には管理職がその都度返答する形で、本委員会が進められた。

<生徒アンケートの項目>

【宗教教育・解放(人権)教育について】

- ・トランスジェンダー案件の教育現場での取り扱いについて、昨年に引き続き質問があった。これは今年度本委員会の構成メンバーとしての学外関係者が、5名中4名入れ替わり新しい方をお迎えしたことによるもので、昨年度の報告と同じような内容をお答えした。つまり、このテーマについては教職員間の学びが必要であり、学校として一致した見解を持つには至っておらず、生徒に対しては、現段階では悩みを抱える生徒への個別対応ということになっている。正しい知識や思考方法は若い時分に付けておく方が良いと考えるが、この案件を一律に生徒に導入する術を私たち教員が持ち合わせていないので、繰り返しになるが教職員の学びが第一に必要であろう。確かに生徒の方が柔軟さはあるのだとは思っている。

関係者委員の方からは、特に高等教育機関の女子校でそのような特性の生徒の入学を受け入れる学校が増えてきているが、大阪女学院ではどのようにしていくかとの意見も出た。

このことについては、小中段階においては自我の未成長段階であるので、現在の方針を変更することは考えていないことを申し上げた。

- ・報告の中に、民族に関わる差別事象が学校現場で起こった点についても、今一度どういった案件であったかを説明し、その事が起こる要因の一つに、入学前からの価値観やSNSなどからの情報が子ども達に安易に入り込んでいることがあるので、私達教職員が現実から目を背けることなく対峙する姿勢をもち、正しい知識を身につけるべく学習会に励んでいることと、中学入学後、時を置かずして、「民族」についての学びを始めたことを説明した。

【生徒指導について】

- ・生徒達自身が、自ら社会のマナーは身につけていると答えている層が多いことは評価できるが、わずかな人数ではあるが、マナーが身につけておらず、日々学校内外で問題となっている。特に、化粧や物の食べ歩きが目立つので、そのことに気づかせる指導がほしいとの意見があった。また、盗撮者が学校周辺に出没することなので、安全性についての呼び掛けを強化してほしい、そのためにも服装をきちんとさせる必要があるとの意見もあったので、引き続き指導を行いたい。

【学校行事について】

- ・生徒達の前向きな様子が高いポイントからも見受けられることが嬉しいとの意見を頂く。学校として、更に生徒の自主的な活動となるよう行事改革を推進し、主体的で対話的、及び深い学びのスタイルとなるようにしていきたい。

【授業評価について】

- ・昨年度に引き続き、過年度比較グラフを見て、微少ではあるものの、「教科に対する興味」「授業での集中力」が落ちてきている点について話し合う時間を割いた。「教師の年間計画力」「説明のわかりやすさ」は一定の評価を得ているので、授業力そのものが落ちているわけではないとみているが、やはり、生徒の主体的で対話的、及び深い学びのスタイルを意識した授業展開が必要となっているといえよう。また、このアンケート形式そのものも、一斉授業的なものを前提とした問いかけとなっていることが問題であり、質問内容の見直しが必要である。今年度アンケートで見直しを行いたい。
- ・また、関係者委員の方から、勉強のことについて先生に質問したくても、今は忙しいからということではなかなかその時間をとってもらえない、あるいは生徒が遠慮をして言い出しにくい環境にあるのではないかと指摘も頂いた。教師の働き方の観点と併せて生徒の教育環境の観点からの見直しが喫緊の課題であろうと思われる。
- ・さらに関係者委員の方から、自己開示の力が落ちているのではないかと意見を頂き、他の方のご意見を聞く。教会説教でも神学的な講義だけでは信徒はついてこないのでは、現代の事項と絡み合わせていくようにしている、授業にもそのような工夫が必要ではないかとの意見を頂く。
- ・受け身の学習態度ではいけないので、もっと自主的な活動となるように授業のなかで興味関心を持たせることも大切だが、教師への意識付けはどのように持たせているのかという質問も受けた。
- ・自分のことを相手に伝えるのが怖いという生徒が増えているのではないかと、自己肯定力が低い生徒もおり、大阪女学院ではそのような事のためにも礼拝などの宗教教育を柱にして充実した取り組みをしてきているのだが、もう少し工夫がいるのではないかと感じた。

【進路指導について】

- ・高校スタート地には進路選択を、文系・理系・英語科のいずれかにしなければならないことは時期が早いのではないかと、また、進路を考える仕掛けは数多くあるのだが、それが学力に関連づけられていない面がみられ、基礎学力の向上が課題になっているのではないかと、という指摘も頂く。進学率についての質問もあり、大阪女学院では生徒の希望を中心にして先述のような進路指導スタイルをとっていることを再度申し上げますと共に、基礎学力定着の取り組みについても重要課題であるとの認識を伝えた。
- ・6年間の学びをしっかり行い進学状況で成果をあげるだけでなく、人生の土台の部分に大切な教育をつけさせていることには自負があり、これは昔から変わっていない。
- ・推薦を希望している生徒が増えてきているのは、昨今の進学状況を鑑みての説明がつくが、受験本番よりも日頃の学習の取り組みをより頑張るようになってきている面では評価したい。
- ・また、英語の資格試験活用に関して、大阪女学院生は英語教科に前向きに取り組んでいる生徒も多く、学校としても力を入れているので、本校生徒にとっては力を発揮できる制度である。
- ・キャリアガイダンスの際、社会福祉分野の人材が足りないのでは、積極的に紹介してほしい。関西学院の神学部でもそのような取り組みを行っている。社会福祉分野で活躍する卒業生を呼ぶなどして、特に中学段階で関心と理解を育ててほしいとの意見を頂く。

【国際理解教育について】

- ・留学生との交流についての質問があったので、現在の受け入れ状況を説明した。また、進路において海外を視野に入れている生徒が増えてきていることを説明した。高校3年次に、卒業後の進学先として、国内との併用で海外進路を考えている生徒もいる。
- ・高校時代にある年間留学や中期留学についても状況を説明した。

<教職員のアンケートの項目>

- ・教職員広報の時間が増えて特に忙しくなっているとの話題になり、クラブ活動なども含めて外部委託の質問があった。経済的な面、責任の所在。生徒の人権と安全の確保という点で多くの課題があることをお伝えした。

<保護者アンケートの項目>

- ・回収率の低いことについて、昨年度頂いた意見として、紙媒体方式ではなく、Web方式の方が回答しやすく、また確実に学校家庭相互間がつながるという面から見ても前向きに考えたい。
- ・危機管理の取り組みについて、学内にて最低72時間は生活できる為に必要な食糧・寝具・簡易トイレ等の備蓄は、まだ不十分である。

毎年のことではあるが、世の中の変化がめまぐるしい折から、今年は学校の取り組みや今後の計画を説明することに多くの時間をいただいた。

学校関係者評価委員会のメンバーの皆様が、学校の取り組みに深い関心を示し、愛情をもって、生徒、保護者、教職員を見守り支えてくださっていることを心強く感じた。